

# 山口県 令和4年度研究報告書

## 研究成果（概要）

学力向上のための基盤として「読解力」に着目し、読解力を子供に育てたい資質・能力の一つとしてカリキュラムとランドデザインに明確に位置付けることで、学校全体で組織的に育成する体制を整えることができた。さらに、ICTを活用した授業実践を積み重ね、振り返りに着目したデジタル特有の学びを充実させながら、言語能力や情報活用能力の向上につなげることができた。

## 1. 研究課題と調査・取組内容

### （1）具体的な研究課題

学びの基盤となる読解力などの言語能力や情報活用能力を育成するため、全学年において一人一台タブレット端末を用いた指導方法を開発するとともに、コミュニティ・スクールの仕組みを活用して学習を深める体制を導入し、その効果を検証する。

### （2）研究課題に基づいて実施した調査・取組内容

#### <県教育委員会>

- 県独自のC B T方式による学力調査や全国学力・学習状況調査の問題や質問紙を活用し、読解力などの言語能力や情報活用能力に関する結果を分析した上で、適切な学習課題や指導方法を検討し、取組実践校に対する指導助言を行った。
- 学校の授業研究会において、指導主事が指導・助言を行った。
- 取組実施校のある自治体以外の比較対象校を選定し、比較検証を行った。
- 調査研究推進のため、小学校専科加配教員（英語以外）、児童生徒支援加配教員（学習指導）を配置した。
- 学力向上推進協議会を設置し、取組実施校の実践について指導・助言を行うとともに教育効果について検証した。協議会では、同一中学校区の管理職等に出席要請し、中学校区で一体となって児童の学びをサポートできるようにした。
- 本調査研究の推進力をあげるために、学力向上推進協議会だけでなく、大学教授・市教委担当・管理職・県教委担当が連携し、Google チャットを用いて頻繁に情報共有する体制を整えた。

#### <市教育委員会>

- 取組実施校において、実践の進行管理及び指導・助言を行った。
- 比較対象校の状況把握を行い、読解力などの言語能力や情報活用能力の育成に向けた取組の効果について、リーディングスキルテスト等の読解力に関する調査を活用して、取組実施校との比較検証を行った。
- オンライン授業等の公開授業において、防府市ICT活用教育専門員・支援員を派遣した。
- 学力向上推進リーダーと連携し、読解力の育成に焦点化した授業改善について助言した。
- 教育効果及び課題を検証するとともに、次年度に向けた実践について助言を行った。
- 読解力向上に向けた実践取組校の研究成果等を広めるため、市主催の小・中学校合同教務主任会、学力向上担当者会議等を開催した。また、管理職及びミドルリーダー等の多様なキャリアステージの教職員を対象とした自主研修会も実施した。

## <取組実施校>

### 【読解力向上に向けたカリキュラム・マネジメント】

- 読解力などの言語能力や情報活用能力を育成するプロジェクトチームを組織し、学校のグランドデザイン作成を軸に調査研究を推進した。その際、学びの主体である児童自身が身に付けたい資質・能力を把握し、自己の学びを振り返えられるようにするために、グランドデザインの児童版を作成し、成長を実感できるようにした。
- 高学年における教科担任制を実施し、学級間格差を生むことなく、教科特有の豊かな学びを創出できるよう組織マネジメントを行った。

### 【ICTの活用】

- 全学年において、タブレット端末を用いた的確な情報を収集・選択・分析を行う体系的な学習課題の開発や指導方法の工夫・実践を行った。その際、一部の教員に留まったり、苦手な教員が抵抗感をしめしたりすることのないよう、全ての教員が研修に関わる実践事例の共有の場を設定した。
- 質的なエビデンスとしてロイロノートを活用した振り返りを蓄積していき、集めた振り返りから意味のある有効な事例やエピソードを取り上げ、授業改善に生かした。また、個人の振り返りを全体共有する場面では、板書を活用しながらタブレットに取り込んだり、板書を使って振り返りの説明をしたりと児童の豊かな言語活動を引き出すようにした。
- 山口県学力定着状況確認問題がC B T方式で実施されたことを活用し、テスト実施後に、それぞれの間違いに応じたやりなおしをタブレット端末上で行い、課題に応じて取り組んだ。

### 【コミュニティ・スクールを核とした体制構築と地域との連携力をいかした教育課程の編成】

- コミュニティ・スクールを核とし、学校運営協議会に児童が参加して熟議を実施し、学校・地域・保護者そして児童が一体となって、身に付けたい資質・能力を明確にし、グランドデザインに反映した。
- 総合的な学習の時間において、地域人材や高校生等の支援のもと、タブレット端末でロイロノートを活用し、修学旅行や校外研修等で児童が収集・選択した情報や画像等を用いて、発表する取組を促進することで情報を発信する力を高めた。その際、デジタル・シティズンシップ教育を基盤とした教育課程となるよう、生徒指導部及び研修部が連携し、保護者や児童と合意形成しながらすすめられるように必要な情報を適宜提示した。
- 児童が読書に親しむことを目的として、地域人材による読み聞かせや学校図書館司書と連携した児童の委員会活動を充実させた。

### 【効果検証】

- リーディングスキルテスト等の読解力に関する調査を実施し、読解力などの言語能力や情報活用能力の現状を把握し、課題を共有するとともに読解力向上に向けた取組の方向性を検討した。山口県が実施する、県学力定着状況確認問題（C B T）を活用し、その正答率等からそれまでの取組と成果の関係性を検証した。
- 山口県が実施する県学力定着状況確認問題（C B T）を活用し、正答率等から読解力に関する現状を分析し、リーディングスキルテストの結果との比較により、取組の効果について検証した。リーディングスキルテスト等の読解力に関する調査を実施し、読解力などの言語能力や情報活用能力の育成に向けた取組の効果について検証した。
- 全国学力・学習状況調査や、山口県が実施する県学力定着状況確認問題（C B T）・4月確認問題における正答率の変化を捉え、比較対象校の変化と比較することで、学校の組織体制の変容を捉えた。
- ロイロノートを活用した振り返りを質的なエビデンスとして蓄積し、児童の振り返りから意味のある有効な事例やエピソードを取り上げ、授業改善につなげた。同時に、読解力向上に向けた取組と成果の関係性を児童質問紙から検証した。

## 2. 効果検証内容・結果

### (1) 効果検証のための指標

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	山口県学力定着状況確認問題の正答率	山口県教育委員会	資質・能力のうち特に「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力等」の状況を検証する。
2	山口県学力定着状況確認問題の児童への質問紙調査	山口県教育委員会	資質・能力のうち特に「学びに向かう力、人間性等」の状況を検証する。」
3	国立情報学研究所リーディングスキルテストの正答率	国立情報学研究所	資質・能力のうち特に「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力等」の状況を検証する。
4	意味のある有効な事例やエピソード	取組実施校	振り返りの内容から授業改善につなげる取組と成果の関係性を児童への質問紙調査から検証する。

### (2) 指標に関するデータの取得方法（時期、回数等）

No.	検証のための指標	データ取得の時期、回数等
1	山口県学力定着状況確認問題の児童への質問紙調査	令和3年10月、県内全小学校の児童に対して質問紙調査を実施した。
2	山口県学力定着状況確認問題の学校への質問紙調査	令和3年10月、県内全小学校の校長に対して質問紙調査を実施した。
3	国立情報学研究所リーディングスキルテストの正答率	令和3年7月に取組実施校と防府市の比較対象校児童に対して、リーディングスキルテストを実施した。
4	全国学力・学習状況調査の正答率	令和4年4月に、県内全小学校の児童に対して全国学力・学習状況調査を実施した。
5	山口県学力定着状況確認問題の正答率	令和4年10月に、県内全小学校の児童に対して学力定着状況確認問題を実施した。
6	山口県学力定着状況確認問題の児童への質問紙調査	令和4年10月、県内全小学校の児童に対して質問紙調査を実施した。
7	山口県学力定着状況確認問題の学校への質問紙調査	令和4年10月、県内全小学校の校長に対して質問紙調査を実施した。
8	国立情報学研究所リーディングスキルテストの正答率	令和4年11月に取組実施校と防府市の比較対象校児童に対して、リーディングスキルテストを実施した。
9	意味のある有効な事例やエピソード	毎時間の授業と単元の締めくくりにおいて振り返りを実施した。

### (3) 検証の際に比較の対象とする学校等

取組実施校	比較対象校	比較対象とした理由
防府市立華浦小学校	防府市内小学校 1校 防府市外小学校 4校	学校規模や学力の状況が類似しているため。 取組を実践する自治体と、規模、経済的背景等が類似している市において、学校規模や学力の状況が類似しているため。
計 1 校	計 5 校	

### 3. 考察（指標に関するデータの分析結果、本調査研究における取組の有効性等）

防府市立華浦小学校の特徴的な取組として、学校・地域・保護者、そして子供が一体となって取り組む熟議があげられる。この熟議では、学力向上の観点から子どもに育てたい資質・能力について議論しており、学校経営のためのグランドデザインにも明確に示されている。また、子供にもわかりやすい言葉で示された「児童版グランドデザイン」もつくられており、学校・地域・保護者、そして児童が一体となったカリキュラム・マネジメントを実現している。

また、読解力向上に向けて、ICTを活用した授業づくりに注力したことは、令和3年度児童の学校評価アンケートの結果から「授業がよくわかるようになった」と肯定的に受け止めている児童の割合が増えていることがわかった。

加えて、全国学力・学習状況調査質問紙「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強に役立つと思いますか。」（右図）において、「1」（役に立つと思う）を選択した児童が84.0%、「2」（どちらかといえば、役に立つと思う）を選択した児童が14.9%おり、ICT機器を活用した学習のよさを実感している。



防府市教育委員会の分析により、リーディングスキルテストと県独自の学力定着状況確認問題の結果を重ね合わせ、双方の結果に相関関係が見られたことと、子どもたち一人ひとりの伸びや落ち込みを確認できたことも成果である。比較対象校との比較でも、昨年度から今年度にかけて学力の伸びに差異が見られている。

また、対象校との比較においても学力の伸びに違いが見られたことも特徴的である。

県独自の学力定着状況確認問題において読解力の育成を意識した問題を作成し、読解力に関する現状把握ができたことと、基礎的読解力を測定・診断するリーディングスキルテストで読解に必要なプロセスのどこに課題があるのかが明確になったことにより、学力向上に向けた具体的な手立てを基にした授業改善につなげることができた。

#### ○リーディングスキルテスト受検結果

（※数値は、小学生における偏差値を表したもの）

	令和3年7年 (94名受検)	令和4年11年 (87名受検)
係り受け解析	43.37	52.85
照応解決	46.05	53.63
同義文判定	46.85	52.16
推論	45.19	55.06
イメージ同定	48.10	55.12
具体的同定（辞書）	47.82	53.43
具体的同定（理数）	46.39	53.43

#### ● 対象校との伸びの比較 能力値

	華浦小学校	対象校
係り受け解析	0.48	0.43
照応解決	0.60	0.49
同義文判定	0.32	0.33
推論	0.47	0.44
イメージ同定	0.61	0.45
具体例同定（辞書）	0.61	0.55
具体例同定（理数）	0.55	0.50

○全国学力・学習状況調査と山口県学力定着状況確認問題における華浦小と比較校の県平均値との差

実施		市内		市外			
		華浦小	比較校 1	比較校 2	比較校 3	比較校 4	比較校 5 s
R 3. 4月 県 (5年)	国語	+3.8	+4.1	+3.8	+2.8	+4.2	-0.3
	算数	-2.1	-2.1	+6.2	+3.9	+6.3	+5.1
R 3. 10月 県 (5年)	国語	-0.7	+3.2	-0.9	-2.3	+3.1	-0.9
	算数	+0.6	-1.4	+0.7	-3.6	+2.1	-0.1
R 4. 4月 全国 (6年)	国語	+5.0	+5.0	+2.9	-0.7	+2.1	-0.7
	算数	+6.9	+6.9	+3.1	-0.6	+4.4	±0
R 4. 10月 県 CBT (6年)	国語	+7.4	+2.4	+3.9	-2.8	-0.7	-0.1
	算数	+5.3	+0.9	+2.3	+2.8	+1.8	+4.3

## 防府市立華浦小学校 6年生 学力の変容

防府市教育委員会

対象学年	小5		小6		中1
実施時期	R3.4月	R3.10月	R4.4月	R4.10月	R5.4月
①山口県	63.2	52.9	65	63.8	?
②華浦小学校	67	52.2	70	71.2	?
②-①	3.8	-0.7	5	7.4	!

**引き出したい力を児童と共有**  
(ランドデザイン)  
学校・地域が一体となる  
カリキュラム・マネジメント

**ICT・地域人材を活用した豊かな学び**

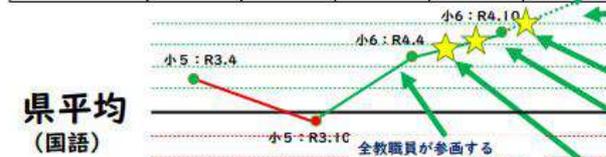


板書を活用して学んだことを再構築



学んだことを確かめる振り返りの共有  
学びの過程を認知する振り返り

**県平均 (国語)**



小5: R3.4 → 小6: R4.4 → 小6: R4.10 → 中1: R5.4

全教職員が参画する R4ランドデザイン構想

**学力向上の基盤づくりに向けた取組**

- ポイント① >>> 「引き出したい振り返り」の明確化  
→ 終末から逆算する「授業構想案」
- ポイント② >>> 振り返りの充実 (端末の活用)
- ポイント③ >>> 学んだことを表現する場の設定  
(教科・総合的な学習の時間)
- ポイント④ >>> 多様な大人からのフィードバック (価値付け)



校内研修の充実  
・板書型指導案  
・授業構想案



地域の大人からのフィードバック



ICTを活用した伸びやかな表現



熟議への参加 (6年生が参加)



発表会への招待



ICTを活用した伸びやかな表現

子どもたちの声を反映させたグランドデザインを作成し（右図）、学校・家庭・地域で共有したことにより、読解力向上に向けて全員が足並みを揃えて実践していく土台ができた。その土台は子どもたちにもよい影響を与えていることが10月に実施した県独自の質問紙結果から読み取れる。たとえば、「授業では、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている」、「授業で自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表することができている」や「国語が好き」という児童の割合が高いことなどである。

研究1年目は、学校・家庭・地域・子どもたちに対して、学力向上の基盤となる読解力を育成するための土台を整えることができたことが最大の成果と言える。

研究2年目は、教科担任制をいかして教科におけるデジタル特有の豊かな学びを実現できたことが成果としてあげられる。例えば、算数科における振り返りの場面では、5分から10分程度の振り返りの時間を確保し、自己の学びを振り返って、必要に応じて板書や図表を画像としてとりいれながらタイピングすることを基本とし、タイピング技能の向上による言語活動の充実が成果としてあげられる。

（右図）そのことは、調査における県平均正答率や、比較対象校との伸びの差においても明確にあらわれている部分であり、教員も自信をもっているところでもある。

また、コミュニティ・スクールを核とした教育課程の編成については、総合的な学習の時間等を充実させ、タブレット端末を使って表現力を豊かにする子どもたちの姿が見られたことも大きな成果といえる。

#### 4. 課題

令和4年度リーディングスキルテスト結果分析によると、全ての領域において伸びがみられた一方で、「同義文判定」は比較対象校の伸びには及ばなかった。読解力に係る今後の課題は、「同義文判定」（同時性を損なわず言い換えられたの文等）の領域について、授業で扱う教材の中にある様々な具体的な文例を焦点化した上で授業実践することである。取組実践校では、教員が児童の読解力育成のポイントと手立てについて指導案に明記した上で授業改善を行ってきたが、この手段が有効であったかを検証することも取り組むべき課題としている。

読解力に着目してはじまった調査研究であったが、進めていくうちに、デジタル特有の学びを充実させていかなければ、一部の資質・能力だけを伸ばすことは極めて難しいことがわかってきた。そこで、教科担任制の仕組みを十分に活用し、各教科等におけるデジタル特有の豊かな学びを引き出すことに着眼し、授業改善に生かしたところ、教員だけでなく、児童が自信をもって学習を改善していくようになっていった。しかしながら、情報活用能力等の育成の取組は充実してきたものの、本調査研究においては教育課程に適切に位置付けることができなかった。そのため、先行実践の洗い出しは行ったものの、教職員に落とし込むには複雑であったため、教員・保護者・児童用に翻訳する（簡易化する）必要があり、今後の大きな課題の一つとなっている。また、情報活用能力を体系化することに課題があるのではなく、体系化されている情報活用能力を教員・保護者・児童に落とし込むだけの手段をもっていないところに課題があり、今後の学校マネジメントの課題といえる。

さらに、研究を進める中で、実施校における学びを中学校区全体で共有する必要性を感じた。小中連携の加配教員が動いてはいるものの学びの連続性を豊かにするには至っていない。また、学力向上推進協議会に中学校区の管理職等に参加していただいたが、小小連携や小中連携については課題が残ったままであり、今後の研究と研究体制のさらなる進化が必要である。



ふり回り(10分の2)



今日は形が同じ図形の、対応する直線の長さや角の大きさについて調べました。形が同じか調べるポイントは角が等しいかや対辺の長さの比が等しいかでした。私は最初全然意味がわかりませんでした。角が縮小されても拡大されても同じになるのも初めは意味がわかりませんでした。角の大きさを測るとわかりやすいこともわかりました。今回やったのは全て拡大されていると言いました。だけど問題によっては拡大されていると言えない図形もあると思うので、角の大きさや、線の長さを測って拡大されているのか、縮小されているのかわかるようにしたいです。ぱっと見て2倍にされているのか3倍にされているのかも必要だと思うけど、拡大されているのか縮小されているのかは今日やってみたくてやりたくて。

## 5. 今年度の研究経過

月	内 容
5月	県教委・市教委訪問 華浦小学校において取組開始
6月	県教委・市教委訪問 文部科学省による連絡協議会 授業公開（5年 算数）
7月	県教委・市教委訪問 児童・地域住民・教職員による熟議
8月	県教委・市教委訪問
9月	県教委・市教委訪問 評価委員による実地訪問 授業公開（2年 国語科）
10月	県教委・市教委訪問 山口県学力定着状況確認問題実施
11月	県教委・市教委訪問 取組実施校及び比較対象校へのリーディングスキルテストの実施 児童及び学校への質問紙調査実施 実践研究発表会 「子どもたちの豊かな学びをつくる ～デジタル特有の学びに着目して～」 （於 山口県セミナーパーク 講堂他）
12月	県教委・市教委訪問 学力向上推進協議会 ・協議会委員による授業参観 ・協議
1月	県教委・市教委訪問 学力向上推進協議会 ・中学校教職員、同一中学校区小学校教職員による6年生授業参観 ・協議 取組実施校対象学年へのアンケート
2月	県教委・市教委訪問 文部科学省による令和4年度成果報告会 令和5年度の実践にむけた取組実施校 校内研修会
3月	県教委・市教委訪問

※有識者・華浦小管理職・市教委担当・県教委担当でGoogle チャットを使って頻繁に情報共有した。

## 6. 研究関係者

### (1) 学力向上推進協議会構成メンバー

所 属・役職	氏 名
国立大学法人山口大学・教授	鷹岡 亮
防府市立華浦小学校・校長	川本 尚貴
防府市立華浦小学校・教頭	木原 英樹
防府市立華浦小学校・教諭	吉崎 直樹
防府市立華浦小学校・教諭	中村 由香里
防府市教育委員会・主幹	藤井 学
防府市教育委員会・指導係長	中原 育代
山口県教育委員会・教育調整監	松岡 修司
山口県教育委員会・主幹	稲垣 宏美
山口県教育委員会・主査	大田 誠
山口県教育委員会・指導主事	住江 めぐみ
山口県教育委員会・指導主事	石塚 孝倫

(2) その他関係者

所 属	氏 名	備 考
防府市立桑山中学校・校長	美作 健悟	R3華浦小学校長
防府市立桑山中学校・教諭	道城 美日子	
防府市立華城小学校・校長	後根 茂	同一中学校区
防府市立華城小学校・教諭	西村 光博	
国立大学法人山口大学・特任教授	時乗順一郎	